

| | |
|---------------------------|----|
| 名画とピアノのコラボレーション 森耕治先生 | 3 |
| 近森病院病診連携を考える会 市川博源 | 6 |
| 第20回高知呼吸と循環の会 小坂誠先生 | 7 |
| 第160回地域医療講演会循環器疾患の漢方 浅羽宏一 | 7 |
| 近森会グループ2017年MVP | 8 |
| 心血管カテーテル治療のライブ中継 山本哲史 | 10 |
| 高知医療センター、細木病院からの訪問 北村龍彦 | 11 |
| CitRungs Tossa 高知代表出場 | 11 |
| 第7回心臓血管ウェットラボ 石黒晴久先生 | 16 |

www.chikamori.com ● 高知市大川筋一丁目1-16 tel. 088-822-5231
発行●2017年12月25日 発行者●近森正康 / 事務局●寺田文彦



年頭所感

大きな目標に向かって

社会医療法人近森会

副理事長 近森 正康

稼働率低下を招いた診療報酬改定

2016年4月の診療報酬改定で日本の医療は大きな変化が起きました。

従来の看護師を既定の人数配置することにより診療報酬が得られる「ストラクチャー評価」から、重症度・医療看護必要度によりいかに重症の患者さんを多く診ているか、という「アウトカム評価」が導入され、急性期病院では重症度をキープするために在院日数を短縮せねばならず、稼働率の低下が起きました。

回復期リハビリテーションのステージでもFIMの改善率というアウトカム評価が導入され同じく稼働率の低下が起っています。療養のステージでも、重症患者さんの受け入れが一定割合必要となり、大変切実な局面となっています。

すべてのステージで入院制限が起ることにより稼働が低下し、経営状態の悪化が起っています。

各々が危機意識を持って

近森病院は5カ年計画による建築コストや、増床による先行的人件費増などが重なり全国でも最も影響が出た病院だったと思います。8月以降は「救急受け入れをいかに増やすか」、「在院日数をいかに短縮するか」をテーマにワーキンググループを招集し、実際救急の現場で働く若手のスタッフで対応策を考えました。

医療スタッフ各々が意識を持つことにより救急搬送件数は2016年度7,043台と過去最高となり、長期入院の患者さんが減り在院日数も確実に短縮してきています。

他病院の連携担当医師や看護師の方が当院の転院調整の為に定期的に来院する取り組みも始めました。数年前までは考えられないことであり地域医療の機能分化が急速に進んでいることを体感しています。

黒字基調に安定した経営収支

一昨年の夏以降行った経費の徹底的な削減も大きな成果をあげました。研修費や図書費、材料費、薬剤費、電気代、コピー代に至るまで職員皆様のご協力のおかげで実質年間5億円もの経費削減に成功しています。これらの取り組みを職員一同で行っていただいたおかげで、昨年からの経営収支は黒字基調に安定してきています。

一昨年の経営悪化で不安な気持ちになった方も多かったと思いますが、前向きにご協力いただき本当にありがとうございました。

地域包括ケア病棟の導入から 順調な運営へ

高知県は全国に先駆ける高齢人口減少県と言われています。本年度は上半期の病床稼働率があがらず人口減少の影響が徐々に始めている印象でした。そのため11月に北4病棟34床

を地域包括ケア病棟に転換しました。地域包括ケア病棟はpost-acute、sub-acute、respiteなどに利用できる在宅につなげるための病棟です。現在のところ近森病院では急性期の治療を概ね終わらせて自宅に帰るまでのpost-acute目的に使用し順調に稼働しています。県内でも多くの病院が地域包括ケア病棟を有していますが運営があまりうまくいっていない印象です。近森病院での運営が順調な理由は三つあると思います。

一つ目は毎月900人もの多くの患者さんが入院してきてくれていることです。多くの入院患者さんが入院してくれるおかげで回復期も含めた近森会グループ内の連携で患者さんがあるべき時にあるべき場所にいられるように出来ていると思います。

二つ目は病棟への入室を看護師管理に一任していることでしょうか。重症病棟と一般病棟の連携も以前から看護師中心に行っていたことが今回の導入をスムーズにした一因だと思っています。

最後三つ目は病棟常駐型チーム医療です。看護師の少ない地域包括ケア病棟では看護師は退院支援に多くの力を注ぐこととなります。栄養やリハビリ、薬剤管理などを当院の強みである病棟常駐型チーム医療で各職種が自立自動して業務を行うことによりスムーズに病棟運営が出来ていると思います。

次の頁に続く

前の頁から続く

医師の働き方改革が若手 医師獲得のポイントに

また、医師の働き方改革は今後の医療において非常に大きな問題になってきます。「医師は労働者にあらず」という考え方で長時間労働が常態的に行われています。

しかし、研修医の過労死問題などを受けて厚生労働省は、「医師も労働基準法に基づく労働者として今後は扱う」という指針を打ち出し各医療機関に対策をとるように求めています。

おそらく、救急医療はシフトワー

カーへと変化して、病棟業務は従来の主治医性からチームで患者さんを診る体制が変わってくると思います。当院の対応としては12月から医師のICチップによる勤怠管理を開始し、勤務状況を把握することから始めました。そのなかで質を落とさずに初期臨床研修や専門医研修を、どのように行っていくか。それによって若手医師が当院に集まるかどうかが決まると思っています。

個人を適切に評価できる仕組みを

また、人材育成にも力を入れていきたいと思っています。まず近森会グループとして「地域において患者さんに寄り添う医療サービスを提供する」という目標を立てました。今後病院ごとにビジョン、目標を掲げ部門ごと、各職員一人一人が目標をしっかりとたててもらいたいと思います。

職員みんなが同じ目標に向かいながら、さらに各自の目標に向かって努力

できるようにするとともに、目標の達成度で個人を適切に評価できる仕組みも、つくっていきたいと思っています。

来る2月には近森会グループで初めてとなる「学術集会」が行われます。チーム医療をさらなる高みにあげることが出来る会になると思いますので、職員の皆さんの多くの参加を願っています。

生き残れる病院に

今年の4月には診療報酬・介護報酬同時改定が行われます。多くの患者さんに選ばれる病院であり続け、質の高いチーム医療を実践し、地域医療連携、院内の病棟連携を行っていけば必ず生き残れる病院になれると確信しています。

昨年一年間本当にお疲れ様でした。今年もどうかよろしく願いいたします。

ちかもり まさやす

1月の歳時記

赤い椿

近森病院 HCU 病棟
看護師 辻 啓子



赤い椿の花言葉は「気取らない優美」「謙虚な美德」「控えめな素晴しさ」があります。

この絵は94歳の患者さんが入院中にリハビリで塗り絵されているのをお借りしました。背筋をピンと伸ばして、ひと塗りひと塗り、とてもとても丁寧に描いていたお姿に感銘を受けました。

一年の始まりとして、椿の花言葉のような女性を目指したいです。

つじ けいこ

絵：櫻木智恵子さん



ザ・RINSHO

安心・安全で 美味しいお食事を！

エームサービス株式会社
四国事業部1地区 【高知・徳島】地区
地区支配人 中島 和友さん



エームサービス（株）は、近森会グループ全体（本館・北館・リハビリテーション病院・オルソリハビリテーション病院・職員さん向けレストラン）の、お食事を提供している会社です。全国約1,500カ所の事業所（企業や病院などの施設）で、約26,000人の従業員が日々食事、サービスを提供していま

す。弊社が初めて近森病院で食事提供させて頂いた、1999年から早いもので18年の歳月が流れております。患者さんにとって、入院生活の中でお食事は、非常に重要な楽しみだと考えておりますので、安全・安心で美味しい食事提供を出来るよう日々従業員一同頑張っております。

昨今の診療報酬改定などで環境が変化していますが、食事やサービスの質（選択食やリハのバイキング・嚥下食など）を維持しながら、患者さんが自然に笑顔になるようなお食事を提供できるよう努力して参りますので、貴院関係者の皆様と共に、今後も宜しくお願い致します。

なかじま かずとも



▲職員さん向けレストラン



共に歩む、共に喜ぶ ～その人らしい生活を共に考える～

近森オルソリハビリテーション病院
3階看護師長 岡村 美紀

▼毎朝病棟で行うラジオ体操



団塊の世代が75歳以上となる2025年までに、地域包括ケアシステムの構築が言われている中で、特に高知県は全国に先駆けて高齢社会が進んでおり実現していくことが急務となります。重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい、医療、介護、予防、生活支援が一体的に提供されるシステム作りが大切となります。

当院では、2014年（平成26年）9月より地域包括ケア病棟を開設しました。スタッフ間では、地域包括ケア病棟の役割や地域包括ケアシステムにつ

いての理解にバラツキがあり、今年度の当院看護部目標の評価項目に地域包括ケアシステムについて学ぶことを掲げ、スタッフ間の意識向上を目指し取り組んでいます。

整形外科専門のリハビリテーション病院として、急性期医療を引き継ぎ、多職種と協働しながら日々のリハビリテーションに専念できるように環境を整え、早期から退院支援を行い、入院から退院まで患者さんに寄り添ったケア・援助を行っています。

患者さんが住み慣れた地域で生きがいをもって生活ができることを目指

し、患者さんやご家族を中心に、ケアマネージャー等必要な関係機関の皆様と連携し、安心して生活の再スタートが図れるよう、また、後方支援病院として急性期病院、かかりつけ医、地域の各関係機関の皆様と密に連携し、高知県の地域医療の発展に貢献できるよう努めていきたいと思っております。

おかむら みき

特別寄稿 名画とピアノのコラボレーション

2017年11月26日



▲鍋島佳緒里さん

ゴッホ、太陽は燃えつきたか

ベルギー王立美術館公認解説者 森 耕治 先生



近森病院附属看護学校で作曲家でピアニストの鍋島佳緒里さんとの名画コンサート「ゴッホ、太陽は燃えつきたか」を開きました。ステージ上で、参加者の熱気が伝わってきただけでなく、自分自身、鍋島さんの演奏に感動して不覚にも涙ぐんでしまいました。

この名画コンサートというのは、今から3年半前に35年ぶりにヨーロッ

パから里帰りした際に、どうしても絵の楽しさをもっと多くの人たちに知ってもらいたいと願って、通常の美術解説のほかに、絵のイメージに合った音楽を、生演奏でも楽しんでいただこうと始めました。それ以来、紆余曲折しましたが、今回のゴッホ公演で、ようやく「名画コンサート」が完成された形に出来上がったと確信できました。

また高知の皆様と名画を介してお会いできることを楽しみにしています。

もり こうじ

美術史界の風雲児である森耕治先生は日本でも広く認められるようになり、昨年は宮中晩餐会に招かれるまでになされました。

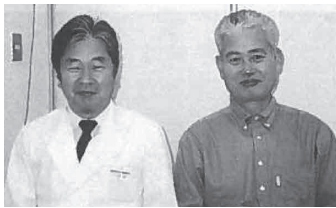
今回の公演では、作曲家でありピアニストの鍋島佳緒里さんとの完成度の高いコラボレーションを見せていただきました。会場全体が美術講演会を超えた芸術的な空間に一変したことに本当に驚きました。

今後のお二人のさらなるご活躍を応援しています。

（近森病院副院長 入江博之）



▲絵画解説ごとにピアノ演奏が



◀「ひろっぱ」1999年1月号よりツーショット

急性期の精神科として

近森病院精神科 田村 雅一

私が着任した2年後、1983年4月に6階建てで新築移転をした時に長期入院患者さんの大量退院計画を実施しました。

当院は「早期退院で外来につなぐ」を旨とする運営方針ですが、残念ながらどんなに治療しても治らない、外来通院のレベルにはならない方も何%かはいます。もし、仮に10%いるとした場合、病院は10年たったら、必ず満床になり入院が必要な患者さんを受け入れる事ができなくなります。

当時の入院患者さんは長期入院の方ばかりでした。そこで建築完成のタイミングで、それまで漫然と長期入院していた患者さんを自宅やアパートに退院させました。退院が困難な患者さんの転院を含め30名ほどになりました。

▼1996年第二分院での記念写真(新築移転1983年4月)



病院側も漫然と入院を続けていても診療報酬は入ってくる、また家族も入院していることで預けている気持ちになり入院が長期化していたのです。

そこで、長期患者を一気に退院させたのですが、さすがに事務長が「何事ですか!？」と飛び込んできました。ですが、意向を伝えると理解は早く、すんなりと受け入れられました。心配だった空床もすぐに埋まり、病院側にもマイナスはありませんでした。

今も「早期退院で外来につなぐ」というモットーは受け継がれています。もちろん、この運用がうまく回るためには、早期に退院を準備し患者を支援するチーム医療が重要となります。また、やむを得ず長期療養が必要な場合、転院を受入れて下さる病院とご家族の理解があつてこそ。当時はぜひぶんソーシャルワーカーが頑張ってくれ



ました。現在の平均入院期間50～60日は全国的にも短く、急性期はこうあるべきと考えています。

ここまでが1997年7月に私がメンタルクリニックちかもり院長になり明神先生に第二分院院長を交代するまでのお話です。ここからは明神センター長へお願いしたいと思います。

たむら まさかず

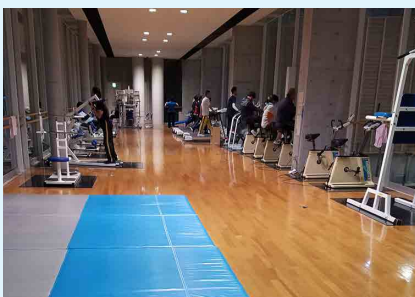


現在の建物に移る前の7病棟(現オルソン病院立地場所)(1968年10月完成)

私の趣味

ダイエット

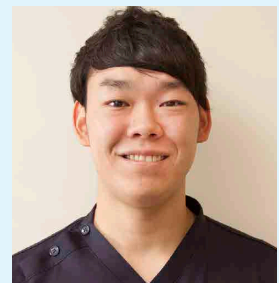
すべては就職してから10kg以上太ったことがきっかけでした…。周りからは次第に「太ったね。なんか顔変わったね。前の方がまだ良かった」などの声が多く聞かれはじめ、鏡に映る自分の姿を改めて確認し、痩せることを決意しました。



近森病院理学療法科 山崎 晃治

それから家の近くのジムに通い始め、2時間ほどの運動を週2、3回するようになりました。今年の6月頃から業務終了後や休日に通い、現在5カ月が経過しようとしています。これまでの経過としては、1カ月過ぎた辺りから、徐々に体重が2、3kgほど落ちはじめ、入浴時には腹部の引き締まりを実感できるようになっていきました。その後も引き締まる自分の身体を見る度に喜びを感じ、いつしかそれが快感と思えるほどになっていました。

7月に行われた健康診断の結果では、就職時より体重は減少し、さら



に筋肉量の増加を認め、喜びを抑えきれなかった僕は、思わずガッツポーズをしてみました。

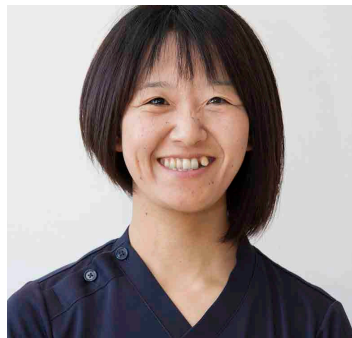
趣味が筋トレというには恥ずかしく、シックスパックや逆三角形には程遠い僕の身体ですが…、身体が引き締まる快感とともに、いつかは「趣味は筋トレ」といえるよう、これからもダイエットに精進していきたいと思っています。

やまさき こうじ

|||| 乞！熱烈応援 ||||

一言と一口を目指して

近森リハビリテーション病院
リハビリテーション部言語療法科
言語聴覚士主任 八井田 明子



言語聴覚士になって10年の節目を迎えます。今、山間部や高齢者が多い高知という地域の特性を理解し、今後の生活も見据えた言語訓練や嚥下訓練を行うことが私たちの役割であると感じています。スタッフも健康で働きやすい場所を作り、切磋琢磨し、最良のリハビリを提供できるように努力を続けていきたいと思っています。

やいだ あきこ

スマイル・サンクス

近森リハビリテーション病院
リハビリテーション部言語療法科
言語聴覚士主任 橘 愛



新人だった頃に、一緒に働いていた仲間がSTの「S」は「smile」、「T」は「thanks」だと教えてくれました。

いつも誰にでも笑顔で「ありがとう」が口癖の彼女に憧れていました。あれから15年。

今日までの自分を支えてくれた方々、たくさんの学びを与えてくれる患者さんやご家族、チャレンジさせてくれる環境に感謝し、笑顔で頑張っていきたいと思っています。

たちばな あい

感謝の心を忘れずに

近森リハビリテーション病院
リハビリテーション部言語療法科
言語聴覚士主任 野島 唯

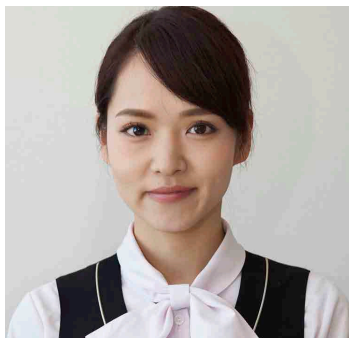


私は、多くの人に支えてもらいながら仕事をしています。言語聴覚士としてもまだまだ経験は浅く、知らないことも未だにたくさんあり、臨床場面で困ることも多々あります。そのような時、私の背中を押してくれる仲間が周りにたくさんいます。日頃から感謝を忘れずに、今度は私が背中を押してあげられる存在になれたらいいなと思っています。

のじま ゆい

新たな気持ちで

診療支援部医事課
主任 津野 直美



社会人1年目から近森病院に就職し、これまで先輩方や部署内外の多くの皆さんに助けられながら今日まで勤めてくることができました。この度主任を拝命し身の引き締まる思いでいっぱいです。

まだまだ未熟な私が責任のある役割を果たしていけるのか不安ですが、自分自身が成長し少しでも周りのスタッフの力になれるよう、日々業務に励みたいと思います。

つの なおみ

ハッスル研修医

日常の中で



初期研修医 前田将宏

大学から高知にきて早7年。高知に来てからお酒を覚えました。おいしい日本酒がたくさんあり、魚もおいしく、ひとたび街に繰り出せばまだまだ知らないお店がたくさんあり、おいしいお店を探すことも楽しみになっています。

近森病院に入職してからこれまで、いろんなことを経験させていただきました。Walk in 外来を最初に見させていただいたり、病棟の患者さんと実際に話をすることで、患者さんがいま必要としているのは何か？何で困っているのか？ということを考えられるようになってきた気がします（まだまだ足りない面もありますが…）。

仕事以外でも、近森のよさこいに参加してもらい、いつぞやのひろっぱでは大きい写真まで載せていただきました。（編集の方ありがとうございました！）ほかにも忙しい合間をぬって、趣味のギターを弾いたり、バンドをしたりと充実した研修生活を送れるようになってきました。今後もオンオフをはっきりとさせて仕事をしていきたいです。

まえだ まさひろ

近森会 保育室 そろと

今回は芋掘り遠足が悪天候で中止になり残念でしたが、「そろと」にたくさんのさつまいもが届きました。





東北大学教授
荒井啓行先生

国立長寿医療センター
教授 荒井秀典先生

「認知症（第2回 11月7日）」 「フレイル（第3回 12月14日）」 の開催報告

社会医療法人近森会
学術担当理事 土居 義典



第2回の東北大学教授荒井啓行先生による「認知症を知り認知症対策を考える」の講演は、認知症研究の第一人者としての研究成果と多くの臨床経験をふまえ、認知症の発症には、加齢・糖尿病・高血圧・喫煙などの生活習慣病、遺伝子などが関与し、変えることができるのは生活習慣病であること、

さらに認知症克服のための展望などの話があった。

第3回の国立長寿医療センター副院長荒井秀典先生による「フレイルの意義を考える；健康長寿のために医療専門職が実践すべきことは？」と題した講演では、「フレイル」という概念がわかりやすく解説された。私たちがこ

の「フレイル」の概念を、実際に日常臨床に活用して、高齢患者さんたちへの医療の質の向上を図ることが大切である。

第4、5回にも、医師および医療スタッフの方々の多くの参加を期待しています。

どい よしのり

【第4回】1月11日（木）講師：東京大学大学院 加齢医学 教授 秋下雅弘先生

「これからの高齢者医療：多病とポリファーマシーへの配慮」

【第5回】2月9日（金）講師：名古屋大学大学院 地域在宅医療学・老年科学 教授 葛谷雅文先生

「超高齢社会におけるサルコペニア・フレイルの重要性：特に栄養に関する話題を中心に」

近森病院 病診連携を考える会

2017年11月30日

【一般講演】

「検査に頼らない
心不全診断」

【特別講演】

「これからの心不全管理
はどこへ向かうのか」



近森病院
循環器内科部長
中岡 洋子



北里大学
北里研究所病院教授
猪又 孝元 先生

近森病院を 身近に感じてもらいたい

近森病院消化器内科部長
近森病院地域医療連携
センター長 市川 博源



11月30日（木）に、北里大学北里研究所病院の猪又孝元先生をお招きして、「病診連携を考える会」を開催しました。

地域の先生方に有益な医療情報を提供させていただき、近森病院を身近に感じてもらいたいとの思いで、副院長の川井和哉先生に助けをいただきながら、今回の会を企画することになりました。

当日は、院内外からたくさんの参加

があり、イスが不足する状態で開始となりました。まず始めに循環器部長の中岡洋子先生の一般講演があり、その後猪又先生の心不全についての特別講演がありました。猪又先生の講演は、最新の医学情報と具体的な心不全の身体所見のとり方を織り交ぜながら、時に笑いを誘う大変素晴らしい内容でした。身を乗り出して聴き入っていました。

もっとも感銘を受けたことは、中岡

洋子先生の講演内容と猪又先生の講演内容のポイントが一致していたことです。当院の初期研修医たちには、日々近森病院で日本のトップレベルの教育を受けていることを感じて欲しいと思いました。

これからも地域の先生方に紹介していただける病院を目指し、このような会を企画していきたいと思っています。

いちかわ ひろもと

岡山大学大学院麻酔・蘇生学教授 森松博史先生▼



早期回復を目指した 周術期管理

昭和大学横浜市北部病院・麻酔科教授
麻酔科責任者 手術室長
近森病院麻酔科 非常勤医 小坂 誠 先生



今回の演者の森松教授は、1993年に岡山大学医学部を御卒業され、直ちに岡山大学麻酔科へ入局し、2001年にオーストラリアのオースティンメディカルセンターへ留学されています。2013年に麻酔科教授に就任され、麻酔・集中治療の分野で、学会を牽引している若手のホープです。

今回のご講演“早期回復を目指し

た周術期管理”は、急性期病院の近森病院にとっては関係の深いご講演でした。ご講演はERAS (Enhanced Recovery After Surgery) に始まり、術後管理での色々な方面からのケアが、回復期に及ぼす影響について述べられました。内容は、ICUでの周術期管理チーム、すなわち周術期看護師、リハビリ作業療法士、管理栄養士、歯

科治療等、これらの分野が協力して少しずつ術後患者の状態を改善する。このことが患者の早期回復へ繋がるという内容でした。近森病院でも同様の方向で術後管理が行われており、現在の方向性に間違いがないことが確認されました。内容面では臨床上、参考になる点が多く実に有意義なご講演でした。

こさか まこと



第 160 回地域医療講演会 循環器疾患の漢方

2017 年 11 月 17 日

静仁会静内病院院長 井齋偉矢先生▼



漢方薬は薬ではない

近森病院総合診療科
部長 浅羽 宏一



井齋先生をお招きして、漢方の地域医療講演会が開催されました。精神科

の宮崎先生が始められて今回で9回目になります。今年も多くの方々にお集まりいただき大盛況でした。

今回は、普段聞くことのできない「循環器と漢方」を敢えて演題に選びました。井齋先生もこのテーマで講演するのは初めてと話されていましたが、明日

からの日常診療に役立つ、とても分かりやすい講演でした。

私は講演の中で井齋先生が話された、「漢方薬は薬ではない」というフレーズが心に残りました。漢方薬はインチキだ！という意味ではなく、患者さんによって効果が異なる漢方薬を、薬と定義していいのか？という問題提起です。今後の私の研究テーマになりそうです。

あさば こういち



2017年 近森会グループ MVP



| | 部門、職種 | 受賞者 | 受賞理由 |
|--------------------------------|--------------------------------|--------|--|
| 患者アンケート とくに好感が持てたスタッフ(個人受賞) | 1 近森病院整形外科 医師 | 西井 幸信 | 「3年半続いた痛みも軽減した」、「手術後の治療にも気を配ってくださった」といった感謝の声が多く寄せられています。患者の声をよく聴き丁寧な説明や対応に安心感を与える真摯な姿勢、そして何よりその素敵な笑顔は何物にも代え難く素晴らしいものです。皆の心を照らす存在です。 |
| | 2 近森病院 本館5階C病棟 看護師 | 和田 絢世 | 「最高のナースサービスだった」、「大変明るく何か心が落ち着く」といった感謝の声が多く寄せられ、多くのファンができるほど。いつも明るい笑顔と、治療に対する心配や緊張感を解きほぐす親しみある言葉かけなど、患者さん、職員を含め、病棟を優しさで包み込む存在です。 |
| | 3 近森病院 リハビリテーション部 理学療法士 | 吉村 知洋 | 「丁寧で分かり易く、かつ何を一番に直さなければならないのか、対症療法の在り方、立ち位置、根治療法の付き合い方等重要性を端的に伝えてくれた」、「やる気を出させてくれ、スキルも高く、入院生活を変えてくれた」といった心からの感謝の声が届いています。患者一人ひとりに真摯に向き合い、限られた時間の中でも伝わる誠意を基盤とし、一人の人間として深い信頼関係を結ぶ姿勢は医療人として賞賛に値します。 |
| ハートセンター(個人受賞) | 4 近森病院 救命救急センター (ER) 看護師 | 榎尾 幸聖 | ICUや救命救急病棟などの急性期病棟での幅広い経験を活かし、現在ERで、そのスキルをいかんなく発揮しています。現場での臨機応変な対応は、これまでの経験があつてこそだと思われま。 |
| | 5 近森病院 手術室看護師 | 岩本 奈々 | 夜間休日を問わず心臓血管外科の緊急手術にいつも快く対応してくれています。また、的確で細やかな仕事ぶりも大変素晴らしく、今後もハートセンターの若きエースとして飛躍を期待しています。 |
| | 6 近森病院 画像診断部 診療放射線技師 | 田中 宏親 | 血栓除去の手術、ステントグラフト、TAMIの画像解析において、一翼を担う存在です。また、循環器ライブでは、医師の要望にも迅速に対応し、着実に多数精鋭の一員としてスキルアップしています。 |
| | 7 近森病院 本館5階B病棟 クラーク | 松本 香奈子 | 周りが円滑に業務に専念できるよう、紹介状や必要書類の準備や整理など、ハートセンターの裏方として大きな役割を担っています。検査や治療が立て込んでいながらも、あなたのサポートに随分助けられています。 |
| | 8 近森病院 本館5階C病棟 クラーク | 竹崎 さとみ | 入退院の多いハートセンターで「縁の下の工作員」として、地道に頑張っています。あなたの隅々まで行き届いたサポートがあつてこそだとスタッフ全員が感謝しています。 |



よさこい「ちかもり」のサプライズ演舞



▲近森正康副理事長(挨拶) ▲入江副院長(乾杯) ▲和田院長(中継)

▲表彰 四国管財株式会社 本館夜間総合受付 ▼研修医は今年も元気です



| | | 部門 | 受賞者 | 受賞理由 |
|----------|---|---|--|--|
| 団体 受賞 | 9 | 近森病院 排尿ケアチーム | 大野 直美 國澤 雅裕 谷村 正信 | 排尿ケアにおいて、病棟看護師と緊密に連携し、患者さんの尊厳確保、転倒予防や寝たきり防止などに大いに貢献し、近森病院の質の向上に寄与しました。 |
| | 10 | 近森病院 不整脈 ・デバイス・アブレーションチーム | 坂本 希 西村 有司 | 専門性の高い治療において、最先端の技術や解析にも対応できるよう日々勉強や経験を重ね、通常業務以上の頑張りを見せてくれました。今後のさらなる飛躍を期待しています。 |
| | 11 | 総務部電話交換室 | — | 近森病院の声の窓口として大切な業務を、誠実にそして責任感をもって遂行しています。「はい、近森病院です」という爽やかな、優しさあふれる声は、相手の緊張感を解すだけでなく、癒しを感じられる雰囲気までも備わっています。地域の皆さんを大切にするといい近森イズムを醸成するとともに、職員からの信頼も厚く、日々の膨大な電話対応への奮闘に感謝します。 |
| | 12 | 近森オルソリハビリ テーション病院 介護福祉士 | 行定 太佳子、畠中 由樹 杉村 尚英、吉本 典文 益原 奈々、楠瀬 正倫 南 博人、河邑 智功 濱田 珠見、須藤 朱里 佐竹 恵美子(看護補助) | 患者さんが楽しく入院生活を送れるよう、自らの発案による夏祭りやクリスマス会の開催など、毎回工夫を凝らし意欲的に取り組んでいます。また日々の患者さんへの心遣いも素晴らしく、患者満足度に大いに貢献してくれています。 |
| | 13 | 診療支援部 施設用度課 | 楠瀬 達也、向井 淳次 宮下 公将、松木 宏行 中山 千種 | 光熱費や備品など削減可能な範囲で、さまざまな提案や各部署への協力要請に尽力し、経費削減の実現に大いに貢献しました。厳しい状況の中の地道な奮闘を称えます。 |
| | 14 | 四国管財株式会社 近森病院本館 夜間総合受付 | 百田 哲司、岡本 卓 八松 秀夫、浜田 次郎 | 夜間の総合受付、見回り、会計、救急搬送など多岐にわたる業務を担い、24時間体制の救急病院として大切な役割を果たしてくれています。長期にわたり安定した活躍を見せてくれています。 |
| | 15 | 近森病院 救急救命センター | — | 救命救急センターとして近森病院の根幹を担い、救急搬入件数増加の取り組みを推進してきました。その活動が実を結び、昨年度は最も多い7千件を超える受け入れを行うなど高知県下でトップクラスの活躍をしています。また救命救急センターの指定後5年間の実績が認められ、今年度より県から補助金を受けることができました。 |
| 16 | 近森リハビリ テーション病院 TOYOTA GEAR ロボット班 | 兵頭 勇己、松本 治平 森国 裕、那須 勇太 久川 舞、西森 知佐 和田 仁美、宮崎 亜樹 岡田 耕平、中越昌浩 松本直美、山崎勇気 | TOYOTA ロボットの臨床研究においての優秀な発表は、近森リハビリテーション病院の優秀さを全国に知らしめるとともに、研究継続の8病院の一つに選ばれるという偉業を見事に成し遂げました。 | |

第1回 近森会グループ学術集会 2018 タイムスケジュール

| | | | | | |
|------------------|------------------|--|-----------------------------|---------------------------|---|
| 12:00 ~ | 開会・近森正康大会長よりあいさつ | | | | |
| | 各会場へ移動 | 口演発表 | | | |
| 12:20 ~ 16:10 | 第一部 | A会場 心臓(5)、 症例報告(2) | B会場 チーム医療(5)、 症例報告(2) | C会場 脳神経(5)、 症例報告(2) | ポスター発表(13:40~14:20) 消化器(1)、脳神経(4)、 救急(2)、その他(9) |
| | 第二部 | 消化器(3)、整形(4) | 精神(5)、褥瘡(2) | 地域連携(3)、その他(4) | |
| | 第三部 | 優秀演題(7) | | | |
| 16:20 ~ 17:20 | 特別講演 | 片山医院 院長 片山壽生(広島県) 【ご略歴】元尾道市医師会会長、尾道医師会地域医療システム研究所所長 | | | 日時: 2月10日(土) 12:00 ~ 17:40 場所: 近森教育研修センター |
| 17:20 ~ | 最優秀演題発表・表彰式・閉会 | | | | |

心血管カテーテル治療のライブ中継

近森病院循環器内科
部長 山本 哲史



2017年11月23～25日の日程で行われた心血管カテーテル治療に関わる学会 ARIA (Alliance for Revolution and Interventional Cardiology Advancement) 2017 の一環として、24日に近森病院から治療のライブ中継を行いました。

川井和哉副院長が学会理事会のコアメンバーであり、ライブが実現しました。冠動脈に1名、下肢動脈に2名

のゲストオペレータを招聘し、当院の3名のオペレータと治療を行ないました。症例としては日常的に遭遇する複雑病変を選択しました。

治療戦略の構築や、刻々と変化する状況への対処など、福岡の本会場のコメントーターの先生方と回線を結び、ディスカッションを行いながら治療を進めました。非常に日常臨床に即した有意義なディスカッションが行えま

した。当院からの7症例は全て合併症なく成功裏に終了しました。

常日頃から多くのこのコメディカルに支えられ、循環器の治療は成り立っていますが、今回のライブの成功も彼らのサポートがあつてのことであり、感謝しています。

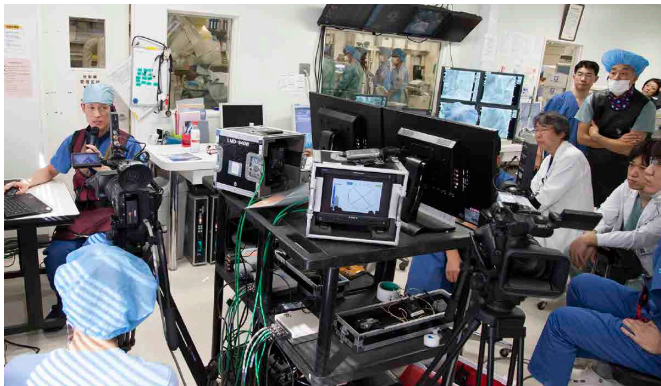
最後になりましたが、ご協力いただいた患者さん方に、心からお礼申し上げます。

やまもと さとし



▲近森病院での手技が福岡本会場で生中継された

▼西田医師による PCI 症例紹介



▲▼手技と解説を行う関部長



お弁当拝見 57 曲げわっぱ



近森病院総合心療センター
5階病棟 正堺 元康



2度目の成人式を機に、少しステップアップね、と妻に渡されたお弁当箱。「曲げわっぱ」なるもので、すぐに洗わないと汚れがとれなくなるからねという言葉つき。

毎回、食した後は洗って持って帰

るのが私の役目となりました。

妻によると、卵焼きには必ず何か入れたくて具材を考えるのが楽しみだそうです。一緒に入っているデザー



トも楽しみの一つです。

しょうがい もとやす

高知医療センター、細木病院からの訪問

近森病院感染対策委員会委員長

近森病院外科部長 北村 龍彦



感染防止対策加算1の医療機関が互いにピアレビューする取り組みを連携加算として診療報酬制度の枠組みの中で規定されている。これら加算により感染防止対策の質の向上、ハードとソフトの整備に努める必要がある。

今回は高知医療センターと細木病院のICTが1日をかけて近森病院にサイトビジットに来ていただいた。書類審査に始まり、3病院の薬剤耐性(AMR)

対策などの意見交換の後、2班に分かれて、手指衛生の直接観察を含めた環境ラウンドを実施し、その後講評となった。講評では、高評価の点も多かったが、部署によっては整理整頓清掃清潔の4Sや資機材の配置、開封日の記載、包交車やおむつカートの物品の多さなどが指摘された。また、手指衛生遵守率は40~94%とタイミングによりばらつきがあり、さらなる遵守率向上が必要である。

今回の2病院の相互訪問によりICTははじめ全てのスタッフが感染管理の必要性を再認識し、基本に忠実に質の向上に努めていけると信じており、関係者の皆様の

ご協力に感謝申し上げます次第である。
きたむら たつひこ



チーム「CitRungs Tossa」● 第17回全国障害者スポーツ大会に高知県代表として出場権を得る



まさに「夢のような話」だった

社会福祉法人ファミーユ高知
障害者福祉サービスセンターウェブ
作業療法士主任 中越 太一



私は、ヘッドコーチとしてテクニカルエリアに立っていた。こんな暑い時間を今までどのくらい過ごしてきたのだろう。選手は、声を掛け合いながらまとまり、ひたむきに全力で走り回っていた。そして、応援席からは、ウェブの仲間たちの声援が響いていた。

3年前の2014年6月に【日本一】という大き過ぎる？目標を掲げ産声をあげた我が「CitRungs Tossa」は、去る10月末に開催された第17回全国障害者スポーツ大会の出場権を得て

高知県代表として全国各地から集まった強豪9チームと共にピッチに立った。試合で選手は、全国の強豪相手に臆することなく、身体を張ってゴールを守り接戦を演じ会場を盛り上げた。

結果は8位であったが、チームの姿勢が評価されフェアプレー賞をいただいた。これも、今までご支援いただいた皆様のおかげと心から感謝いたします。
なかごし たいち



職員旅行

▶東京ディズニーランドのシンデレラ城前で



▼天地淵瀑布にて



▼済州島の守り神 トルハルバン



● 近森看護学校通信 22 ●

新年度に向けての抱負

開校して3年が経とうとしています。振り返ると毎日、目の前の課題を解決することが最優先で、形から



近森病院附属看護学校
事務局主任 五藤 綾美

整えなければならない事柄が多かったと考えます。特に開校2年目には校舎移転もあり、まさしく、考えながら走り続けた3年でした。

4年目を迎える新年度は、1期生がいよいよ社会に出ます。これからは形にしたことの内容と質を深め、卒業生が自慢できるような学校となれるよう、そして一人でも多くの卒業生が現場から求められる人材に育つよう教職員が共に考え、協力できる体制作りに注力していきたいです。

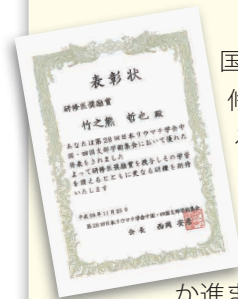
ごとう あやみ

受賞報告 一步一步着実に



初期研修医 竹之熊 哲也

● 学会発表演題名 ●
半月体病変に乏しく、
著明な尿細管間質性腎炎を呈した
顕微鏡的多発血管炎 (MPA) の2 症例



この度、中国・四国リウマチ学会で研修医奨励賞を受賞することができました。

院外研修が続き、準備もなかなか進まず、先生方にはたいへん迷惑をおかけしました。夜遅くまで残って、疾患の知識だけでなく、学会発表や文献探しの基本から教えてくださった吉田剛先生、困ったときにいつも助言をくださった公文義雄先生、近澤宏明先生にはとても感謝しています。

2年目になっても相変わらず要領は悪いですが、ゆっくりでも一歩ずつ着実に成長できたと思います。

たけのくま てつや

ワイン講座 ● 59

ぶどう品種を知り、個性を探る その39 ポルトガル篇

ティンタ・ロリス

正式名称は、アマダイを関西ではグジ、同じようにカサゴがガシラなど呼ばれています。

地方よって呼び名が変わることは、ぶどうの品種も同じ場合があります。今回で紹介するティンタ・ロリスはポルトガル北部での呼び名で、ポルトガル南部ではアラゴネス。スペインではテンブラニーヨと同じ品種です。

滑らかな果実味が特徴で、洗練されたしなやかな味わいを楽しむことができ

ティンタ・ロリス/キンタ・ドス・ロケス/ポルトガル、ダン地方●生産者欄の「キンタ」とは、フランスのシャトー、ドメーヌに当たる言葉で生産者元結めの意味。伝統と革新の見事なバランスをテーマに造りだされるワインはさらなる躍進を続けています。黒い果実の香り、新樽からのバニラ香が心地よく、タンニン、果実味、酸味のバランスがよく、滑らかでエレガントな味わいに仕上がっています。

す。北部のドウロではスティルワインやポートにトリガ・ナショナルと共に用いられ、トリガ・ナショナルの濃厚でパワフルな味わいに、滑らかさと気品を与える補助品種としての役割を担っていました。

後に紹介するキンタ・ドス・ロケスは、1996年にティンタ・ロリス100%のワインを世に送り出し注目を浴びました。このワインが各地で大きな反響を呼び、これを機にポルトガルのワイナリーは

次々と単一品種のワインを生産するようになっていきました。

この品種から作られるワインは濃い色調で、味わいはフルボディのものが多く、酸味とタンニンは少なく感じられ、リーズナブルで親しみやすいワインが多いため、需要は高まっています。

鬼田知明 (有限会社鬼田酒店代表)



第6回ポリオ検診報告

2017年11月4日

ポリオ診察の奥深さを感じ

近森リハビリテーション病院
院長

和田 恵美子



ポリオに罹患した方が、年齢とともに徐々に筋力などが低下するポストポリオにたいして、筋力測定や装具の検討を行う「第6回検診会」がおこなわれました。

毎回他県のポリオ診察を行っている医師と義肢装具士が協力してくれますが、今年は関東や東北からも参加があり、7府県11名となりました。協力の広がりによりポリオ診察の奥深さを感じます。ポリオ罹患者も11名参加され、

前回から開始になったレントゲンの撮影も好評でした。ポリオの方だけではなく障害をもった方、装具を必要とされる方に適切な装具処方が行われていくように今後も活動を続けたいと思います。

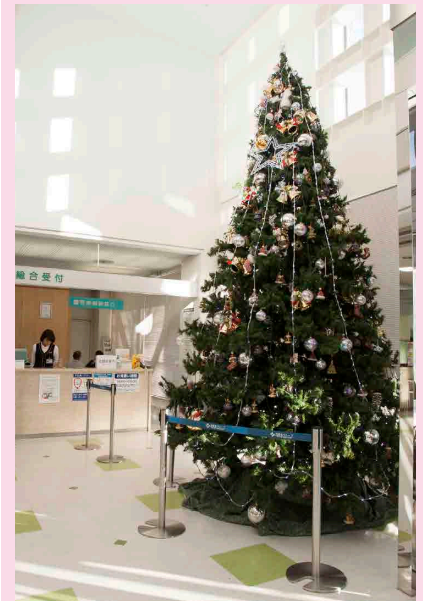
近森リハビリテーション病院では装具外来を毎週木曜日午後に行っています。ご相談は近森リハビリテーション病院医療相談室にお寄せください。

わだ えみこ



クリスマスツリー

毎年恒例、近森病院総合受付にBIG ツリーが飾られました



▲12月22日、ハビリテーリングセンターでマグロ解体ショーを行いました

リレー エッセイ

入院生活での余暇時間のかかわり

近森リハビリテーション病院6階病棟東

介護福祉士 西川 智恵子



当院は2015年に新病院へ引越しをして、昨年8月に新病院では初めての夏祭りを開催しました。5カ月ほど前から企画をし準備・設営などバタバタしましたが、当日は患者さん・家族さんの笑顔がたくさん見ることができました。

職員によるフラダンス披露やヨーヨー釣り・カキ氷などを実施し、外部からお招きした中学生の合唱には、学生さんの健気な姿に感動したり、懐かしい音楽に触れ涙を浮かべている患者さんもいて、夏祭りを企画し

てよかったなと思える瞬間でもありました。

季節の行事だけではなく、日々の業務の中で時間を見つけて、患者さんの余暇時間に誰もが一度はしたことのあるラジオ体操もやっています。患者さんとスタッフが円になり、一緒にラジオ体操をすることで顔を覚えていよう、食事や廊下で会う場面でも、患者さん同士が声を掛け合っている姿を見掛けられました。お誘いの声を掛けると、「〇〇さんも行かんろうかね」との声も

聞かれ、ラジオ体操がいつの間にか、患者さん同士のコミュニケーションの場にもなっているようです。

患者さんに季節を感じてもらえ、なおかつ入院生活という限られた空間での楽しみや、余暇時間を有意義に過ごせるように、今後も介護福祉士として知恵とアイデアを絞り出しながら、患者さんの入院生活の質の向上を目指していきたいです。

にしがわ ちえこ

ニューフェイス

①所属②出身地
③最終出身校
④家族や趣味のこと、自己アピールなど

人の動き

敬称略

おめでとう

図書室便り 2017年11月受入分

- WHO classification of tumours of haematopoietic and lymphoid tissues rev. 4th ed / edited by Steven H. Swerdlow (et al.)
 - 胃癌取扱い規約 第15版 / 日本胃癌学会 (編)
 - 入門・医療倫理改訂版 / 赤林朗 (編)
 - 医師とちょっと話せるようになるための基本的臨床医学知識 / 杉田直哉 (他編)
- 《別冊・増刊号》
- 日本医師会雑誌 第146巻特別号(2)生涯教育シリーズ93 環境による健康リスク / 村田勝敬 (他編)
 - 呼吸器ケア 2017 冬季増刊オールカラー ナース・研修医が必ずぶつかる人工呼吸管理の「わかりません!」を29人の腕利きエースが解決する本 / 中根正樹 (監)

2017年11月の診療数 システム管理室

近森会グループ

| | |
|--------|---------|
| 外来患者数 | 18,297人 |
| 新入院患者数 | 1,026人 |
| 退院患者数 | 982人 |

近森病院 (急性期)

| | |
|--------------|---------|
| 平均在院日数 | 13.68日 |
| 地域医療支援病院紹介率 | 74.31% |
| 地域医療支援病院逆紹介率 | 158.40% |
| 救急車搬入件数 | 542件 |
| うち入院件数 | 288件 |
| 手術件数 | 463件 |
| うち手術室実施 | 306件 |
| うち全身麻酔件数 | 180件 |

● 2017年11月 県外出張件数 ●

件数 66件 延べ人数 108人

編集室通信

弓道の恩師から教わった「真・善・美」という言葉を思い出した。真とは、偽りのない射はどのようにあるべきかと思いを求めること。善とは、心を鎮め、平常心を保つこと。美とは、人間として、心を清らかにし、礼を重んじて弓に向かい合うこと。これは、弓道に限らず仕事においても通じるものがあり、これからも「真・善・美」を目指し精進していきたいと思う。(和)

穏やか、ほんわかオーラで、上機嫌に

毎日上機嫌に過ごせる秘訣

将来の仕事について真剣に考えたのは高校3年生になってからだった。医学部を目指すには、馬力がかかるのが少々遅かったのかも知れない。

が、これがいかにも梅下先生っぽく、しかも毎日上機嫌に過ごせる秘訣にもなっているフシがある。

というのも、梅下先生は親をはじめ周りの人みんなを大好きで、しかも、みんなと仲良し。今でもそうで、昔から…。人間関係良好だから自分に合うペースで事を運びやすく、従っていつも心平坦に過ごせることにも繋がる。

進路選択にしてもゆっくり決めたが、浪人して見事に初志を貫いた。この達成感や、やりきった感が先生独特の穏やか、ほんわかオーラに熟成され、成長した今、患者さんにもスタッフにも好かれる大きな要因になっているようだ。しかも、ほんわかながら、冷静な判断でスルドイ対応をとる印象もあり、周りからは信頼されるのだろう。

好循環を生む仕事のやり甲斐

「自分に合うペース」で事を運べるのは中学時代以来社会人となった今日までもずっと続けている卓球にも当て嵌まる。クラブ活動で選んだ卓球が、少しずつ面白くなり、医学生になったところに「没頭！」に達する。高知大学医学部の岡豊キャンパスと朝倉キャンパスを自分の運転する車で行き来して、いまでも感覚の残る達成感をしばしば味わったようだ。

医学生が学業を疎かにできるはずも



▲仲良し家族で、四国霊場 31 番札所五台山竹林寺へ

なく、それでもプラスアルファにこれだけ情熱を注げたのは、周りの空気に流されることなく、何が自分を幸せにするかの要素に素直に振る舞えたためといえるのではないだろうか。

卓球の練習量は自分を裏切らないと実感でき、しかも通常の一般的な練習メニューよりも「自分に合う練習方法」を見つけて上手になったという手応えを掴めると、ますます面白くなる。

大学を卒業して6年半経過した現在、仕事の基本には内視鏡をいかに上手に正確に操作できるか、がある。操作の上達を実感できればそれが仕事のやり甲斐に繋がり、つまり患者さんやご家族の信頼をも得られるようになるだろう。この好循環が、仕事でのスタッフとの人間関係にも私的な面でも好ましい効果をもたらしているようだ。

自分のペースで物事を考えられ、常に上機嫌なタイプだからといって、日常にイライラすることがないかといえ、むろんそう甘くはない。「むしろ、いっぱいイライラしてしまいます」。が、「イライラしている自分にイライラする」から、「できるだけ意識して上機嫌でいたい」と、自身に言い聞かせる場面も多い、ということらしい。感情をコントロールできる「大人」なのだ。

適当な距離感を心がけたい

医療のスタンスとしては、患者さんとの最初の出会いで信頼関係をどう築くかの土台が決まるから、とくに大事にしたいと考えているという。

近づき過ぎず、かといって離れ過ぎず、「適当な距離感を保つことを心がけたい」というのが、基本的な姿勢である。

さらに、常に患者さんの背景を考慮するというのを、上の先生方からもよくいわれ、「背景を考慮」とはどういうことかを「想像力逞しく考え、方向性を検討できる」ことこそ、自分の強みにしたいとも考えている。



▲内視鏡検査を終え、患者さんにご家族に病状を説明中

上機嫌力の源

家に帰れば、医師の妻と二人の娘に囲まれ、「何から何まで子ども中心の生活」になっている。けれど、それが「何よりもいちばん楽しいとき」だと本当に嬉しそうに頬を緩められるから、これ以上の倅せはないだろう。力強い上機嫌力の源は、やはり家族なのだ。

消化器学会で連続受賞

日本消化器病学会では、研修医奨励賞も専修医奨励賞も連続受賞した。「これは上の先生方の指導のお蔭で取れた賞です。でも患者さんにはよくやっていると思ってもらえるかも知れません(笑)」と、笑顔はまさに上機嫌力炸裂。

症例数が多く、従って内視鏡検査の機会も多く、いまは「自分の腕が上がってきていると思えるのが励みです」と、そのほんわかオーラで周りにいっぱい倅せを運んでくれているようだ。

「見て、触れる」最高の機会 第7回心臓血管ウェットラボに参加して

医療法人広正会 井上病院理事長

循環器内科 石黒 晴久 先生



2017年11月12日（日）、近森病院管理棟3階で行われた「心臓血管ウェットラボ」という勉強会にインストラクターとして参加する機会を頂きました。ウェットラボとは、無菌豚の心臓を用いて循環器領域の解剖や検査、最新治療を学ぶ勉強会で、隔年ごとに開催されており今回で7回目を迎えます。

実物を目で見て触れることが出来る勉強会とあって、受講者は応募多数の中から抽選で選ばれ、高知県内だけでなく岡山・神戸からも受講者が集まり、幅広い職種（看護師医師、研修医、理学療法士、臨床工学技士、検査技師、薬剤師、栄養士、事務、看護学生）の

方が参加されました。インストラクターとしては、心臓血管外科、循環器内科、放射線科、病理診断科、麻酔科の先生が県内外から参加、またスタッフやメーカーの皆さんを含めると総勢193名という大規模な会でした。

今回の内容としては、豚の心臓をメス・ハサミで開きながら心臓の解剖を一通り学んだ後、「心エコー実習、人工弁置換術、CABG、PCI、心臓病理、Maze手術、アブレーション、ステントグラフト、TAMI」の各ブースをローテーションする方式で、午前9時から午後4時までみっちり勉強されました。



各ブースでデバイスの実物に触れたり、実際に血管縫合手技を

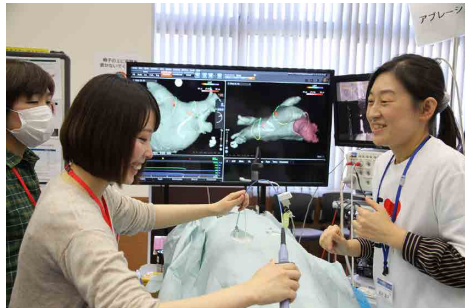
体験したりと、受講者の皆さんは普段出来ない体験が出来たことで、目を輝かせながら実習されていました。様々な職種の方々が集まり、お互いに刺激を受けた良い機会であったと思います。休日にも関わらず、インストラクターの先生方も熱心に指導しているのが印象的で、スタッフの方々の入念な準備のおかげでスムーズに一日が終了しました。

最後になりましたが、私は今年4月より杏林大学病院から地元である土佐市・井上病院に赴任してきました（慢性血栓塞栓性肺高血圧症に対するカテーテル治療が専門です）。

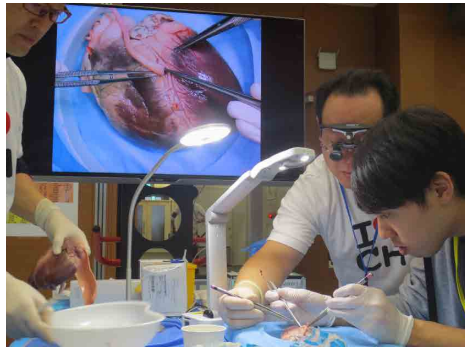
高知県の循環器医療に対する皆さんの熱い情熱を、実感できた良い機会であったと思います。これからも皆さんのお力になれるよう頑張りたいと思います。

いしぐろ はるひさ

▼アブレーション手技の体験



▼冠状動脈への血管吻合



▼本物の人工弁を用いての弁置換術



◀豚心臓の解剖



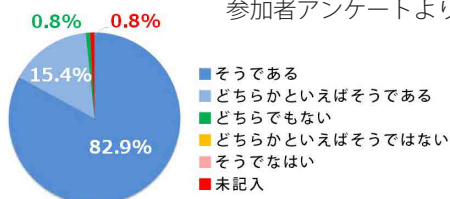
各施設からの参加者

【参加人数】

院内 101 人 + 院外 92 人 = 193 人

【今回のウェットラボは有意義でしたか】

参加者アンケートより



県内外の主要な施設から多くの方にお越しいただきました。単に勉強だけではなく、医療者同士の交流の場にもなったと思います。今回抽選にもれた方は、ぜひ次回にご参加ください。

(近森病院副院長
心臓血管外科主任部長 入江博之)